

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
6月号
通巻550号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



津軽より桜だより、猿賀神社(平川市)

青森県弘前市 石田勝利さん撮影(文・3頁)

平成6(1994)年6月23日 月次祭法話より

半年ごとの大禊ぎの月

法主 矢追日聖(満54歳)

上半期を反省する月

近頃、声が出にくいんやけどね。今日は六月二十三日ですが、昔から六月というのは、禊ぎの月なんです。禊ぎというのは精神修養すること。過去上半期の自分を振り返って、これは良いことをしたなあ、これは悪いことをしたなあというようなことを思い出して反省をする月なんです。

それで今度は十二月になると、また下半期の反省をするというのが、昔の人の言う禊ぎなんです。

年寄りやったら分かる話やろうけど、ふつうは戦争中にね、頭から水をかぶって神さん拜んでたのを、禊ぎのように思っってはったんちがうか。

そうやなくて自分の過去を反省する「ツミソギ(罪削ぎ)」ということなんです。自分の気持ちの中に持っておる悩みとか、色々なものを全部吐き出して反省して、悪いことをしたなあと思ったら謝ったらええんやしね。そんな意味で神さんと向かい合って自己反省をする、これが禊ぎなんです。

最近、これは中国から流行ってきていると思うんやけど、「気功」という若い人が何か一生懸命行をするような修養機関があるようやね。ようテレビで紹介されてるので、私もたまには見ます。私から言えば、それが日本の昔の禊ぎの行なんです。

宇宙の心が入ってくる

肉体の中には色々な種類の神経があるわね。例えば自分の頭で命令したら、手が上がったたり足が動いて走れる、そういう運動神経のようなものがあります。けれども自分の気持ちで左右できない神経もたくさんあるんです。例えば心臓が動いています、自分で止めようと思ったかて止められないですわね。自分の頭の命令を聞かないんですよ。ところがね、自分の過去の色々なことを心で洗って精神統一していくと、心が肉体から離れる場合があるんです。肉体を持っていて人間の脳の中には、肉体を持たないいわゆる幽体とか心霊とか霊魂とか生命体とか、そういうような動くものが入っているんやけど、非常に心が統一してきて自分の現在意識がスーッと抜けていくと、そんな言うことを聞かない神経が、宇宙の大霊と一致してくる場合がある。

そういう状態になってくると、例えば人に絶対言うたら具合悪いと隠しておることを自分の口からガアーツと大きな声で言うてしまう。それは自分の頭では言うことを聞かない神経やからね、宇宙の心でもってものを言わされる。また例えば、自分が肺の病気になっておいたらね、手が勝手に動いて肺を叩いたりすんねん。指の先から色々な力が出ておるんですよ。肺の中のバイキンが死ぬとかね、健康のためになるような場合もあります。そういうのがね、中国でやっている気功にように似ていると思うんです。

心に隠している罪を放り出す

畳の上で寝転んでいくような人も、ポンポコポ

ンポコ上まで跳び上がる人も、時によつたら大勢の人の前で大恥をかくような人もあるやろうし、そういうような現象が出てくるんですよ。それを昔の人は、禊ぎと言ったんです。自分の心の中で隠しておる罪というものを全部外に放り出してしまふ、「罪削ぎ」なんです。

心がカラツとしてくると、天地自然の恵みというものが入ってくる。いわゆる霊気とか神さんのお徳と言ってもいい。そういうものを水にたとえて、ちよつとなまるけど「ミイズ(御稜威)」と言っています。普通の水のことやけれども、水は万物を生かす力を持っているから、「御稜威」という言葉で表わしています。

御稜威が入ってくるから「御稜威ソソギ」なんですけれども、それを頭から水をかぶるように間違えているんですよ。大間違いなんです。

六月は、そういうような意味で上半期の禊ぎの月なんです。ここでは気功のようなことをやっていませぬけれども、皆さんも心の中で色々反省して、ああ、これは悪かったなと懺悔する気持ちを持つてもらつたらそれでいいんですよ。

昔は、大倭でもそんなことをワアーツとやったこともあるんですよ。しかし、そんなアホなことしてたら夜も昼もないようになってくるから、私ももうしんどいしね、最近はやっています。

けど、世間では流行っているようです。道場があつて、さかんに若い人も行っているらしい。喜んでやる方もたくさん居るけれども、まあまあ眉ツバもんやからね、気を付けないけません。下手な行き方をすると盲目信仰になってきて、しまいには気遣いになりますからね。その辺は、よつほど自覚せんといかんのです。行き切ってしまうと、頭の中が変になってきますよ。妄想が出てくるとか、精神分裂を起すとか、そういうことになる

からね。

私も今日までの経験上から言うんやけど、そこにしっかりと本当の指導者がおつてくれたら、気遣いなんかになりませぬけど、指導者が面白半分で行つておつたら、それはもう大変なことになりますよ。

「比登柱」を自覚する

「黎明大倭」という聖歌を歌っていますけれども、昔、私が外に出て行つた頃、ちよつど生駒のトンネルの中に入った時、あんな声が聞こえて来るんでメモしておいたんです。その時に一番最後の五番だけは出てこないんですよ。

出てきて色々言うてきたのは、長曾根日子という昔の大倭の大王さんです。だから、あの文句は私が作つたのちがいますね。最後の五番目は、ここの齋庭でお参りした時はじめて、「常夜のとはり明けそめて 神機は熟す秋は今 大倭の神の子は 昭和維新の比登柱」と出てきたんです。

昭和維新というのは、昭和から時代が変わるという意味なんです。大東亜戦争で日本が負けたでしよ、それで時代が変わっているんですよ。

比登柱はね、「比」というのが霊界のこと、「登」というのが肉体を持っている現界のこと、霊界と現界を繋ぎ合わす柱ということなんです。神社に行つたつて神さんのことを一柱、二柱と言うてしよ。軍隊でも亡くなった英霊に、一柱という言葉を使います。

だから突つ張り棒にする柱と違います。川の工事とかで犠牲になる人柱でもありません。

戦争に負けて日本がひっくり返つた時に、霊界と現界を結び付けていく柱となるのが、大倭の皆さんやという歌なんです。だから長曾根大王でも

トンネルの中では言うことができなかつたので、大倭のここに来ておっしゃったわけです。

私自身も、霊界と現界を繋ぎ合わせる「比登柱」なんです。また皆さん方、大倭の神の子もみんな「比登柱」になってほしいということなんです。ところが現代の風潮を見ておつたらね、日本だけやなしに外国でも霊界のことを言う人がたくさん出てきているんです。テレビなんかでも、霊界のことを言う人がおる。霊界と現界の色んなことを論じているけれども、これが「比登柱」ということなんです。

神の世界、霊の世界と、我々人間の世界の両方が結びついて仲良うならなければ、社会は治まらないし、皆が幸せにならないという、そんな意味の「比登柱」なんです。今日はひとつ、皆さんにそれを自覚してほしいなあと思います。

創作集団「えん」という団体がございます。その皆さんが長曾根大王の顕彰運動を盛んにやってくれています。『倭伝承 長曾根日子命』という小さい本も作ってくれて、あそこにありますので自由で読んで、また返しておいて下さい。是非ほしいという方があれば差し上げますが、それは皆さん方の気持ちの問題なんです、粗末にすると、これもまた罰が当たりますからね。

また今日の『おおよまと』紙には、二月二十三日の申孝祭の時に、私がムニヤムニヤとしやべったことを編集して載せてくれます。薄っぺらに流れていくような内容やけど、読んでおいてくれますか。(平成6年6月号「政権交代——ナガソネヒコの場合)

大袈裟の月ですから皆さんも自己反省しながら、日本の昔の物語も知っておいてもらったらありがたいと思います。終わります。

(文責・編集部)

古代の標準語

青森県弘前市 石田 勝利

朝のテレビインタビューする場面で、今年都内の大学に合格して二ヶ月程の女子大生の初々しい笑顔が映っていた。「出身地はどこですか?」「青森県の五所ヶ原市です」「ああ、津軽の方ですネ」と即答。青森県という津軽のイメージが強いんだろう。「宜しかったら津軽弁を喋って頂けませんか?」「ワヨ(私)△IIZW◎……」。司会者が「全然分かりません」と周囲の方からも笑いを受けていた。

同じ日の夜の番組「ケンミンショー」では、『超難解!津軽弁特集』で、青森県民に訳してもらおうというものだった。ほとんどの方が全訳されていた。しかし意外と思われるのが聴き取れても、真似して喋るとなると絶対無理不可能なのです。生まれ育った地のアイヌ語の混入割合、アクセント、男女別語、年齢、品位と事細かく刺青のように生涯つきまとう、まるで歩いて喋る戸籍です。アイヌは文字を使わず記録をしない、多彩な原語とアクセントで部族の違いが分かった事が原因の一つになったと思われれます。

これを裏付けるような事があった。寅さんで有名な柴又帝釈天に行った時、イメージと程遠く誰も居ない冬の雨の中、空腹だし暖を求めて、裏小路のラーメン屋に入った。「チャーシューメン下さい」と一言だけ言って席に座った。と、厨房の幕の間から、店の奥さんらしき人が、こっそりと「津軽の方ですかア」ダド。思わず「カチャ(奥さん)、ドゴ(出身地)」「西の木造から此処に嫁に来た」と故郷の話題は盛り上がったのです。

なんで津軽弁にアイヌ語が入り混じっているの

か。ずっと不思議であった。本州の北の端の片隅だけに、日本の外国みたいと思われて特に注目されて来訪者が多いのか? その答は意外な人から教えられた。数ヶ月前、発売された臨死体験で有名な人の対談集の中で、「臨死の時、現在の身体を持っていながら他人の視線を借りる事が出来た。……古代スサノオの時代の標準語は……東北地方で使われている方言でした。現代では津軽弁で知られています」とあったが、今まで考えた事もなかった。初めて気付いた。

スサノオ(渡来人)が入るまでは日本はアイヌ人国であった。そう言えば長髄彦、その妹で饒速日の妻となった三炊屋姫という歴史上の人物が次々浮かぶ。なるほど土着の人達である。当時の稲作地一番は奈良盆地で日本の中心地として繁栄していた。だとすると、彼らは津軽弁で話していたことになる。

アイヌ民族も時を経ると、北へ北へ、南へ南へと拡散していく。去年の春の考古学会報告に「北海道アイヌ人のDNAと、沖縄人DNAが合致している」と発表されていた。その意味深さに感激し、誇りに思っているのは私だけかな?

表紙写真UNSD

4月25日、養護老人ホームにヘアークット出張すると「昨日、ホームの桜祭を猿賀神社でやったのサ! 凄く綺麗でサネ、行ってみへ」。蓮の花の猿賀神社に桜の木? あったけ? 次の朝、行って驚いた。全く知らなんだ。

私だけではないようだ。弘前公園は10万人、20万人の出入のニュースだし、岩木山の桜並木20kmも知れ渡りワイワイ賑わっているのに、見かけた人は子連れの若夫婦だけ。あの人にもこの人にも見せたい想いがグルグル頭の中をかけ回る。

こもれる魂魄の地を訪ねて(第44回)

会津の遺恨

兼田 隆

20年程前になりますが、「鹿児島・山口県人をどう思われますか？」と会津若松市在住の方にぶしつげな質問をしたことがありました。その会津の方は少し考えてから「どちらかと言うとやっぱり嫌いかなあ」とおっしゃいました。やっぱり幕末の遺恨は、今でも続いているんやと私は思った記憶があります。

今から150年ほど前、300年続いていた徳川幕府が終わりを迎えようとしていた頃、会津藩は徳川家の親藩として、京都守護職(治安を護る警察)に就任します。会津藩御預の新撰組を配下におき、尊皇攘夷派(長州を中心とした勢力)と激しく対立、その時の遺恨が、後に会津藩を窮地に追い込みます。

時代は王政復古のクーデターを経て、鳥羽・伏見の戦いから戊辰戦争が始まります。

錦の御旗と近代兵器で勝る官軍の前に、会津藩を中心とする幕府軍は敗れ去ります。故事ことわざ「勝てば官軍、負ければ賊軍」でもあるように朝敵(天皇に逆らう賊軍)の汚名も着せられ、それぞれ領国に落ち延びます。

東北では、「奥羽皆敵」と示した官軍側参謀世良修蔵を殺害したことをきっかけに、東北戊辰戦争がおこりました。

会津側は母成峠という藩境で官軍側を迎え打ちますが、勢いついた官軍側をとどめることができず、猪苗代湖をへて会津城下へと進行を許すことになりました。

支えきれなくなった会津藩は予備兵力であった16歳から17歳を中心に組織された白虎隊に出撃命をだしました。

漆黒の闇と雨の中、孤土山に塹壕を掘り露営した初陣の白虎隊は、早朝、猪苗代湖北西の戸ノ口原で官軍側と戦闘となりましたが、近代兵器にはかないません。生き残った20名の白虎隊士は敵軍を避けて猪苗代湖から若松に引かれている用水路の戸ノ口堰の洞門をくぐり抜け若松城下を見渡せる飯盛山中腹にでます。そこから見えた光景が黒煙と炎に包まれた城下の惨状でした。会津はずでに降伏したと思ひ込み、集団自刃という悲劇的な最後を迎えるのです。官軍側は白虎隊士の亡骸を葬ることを許さなかったといえます。野ざらし状態になっていたものを見かねた方が、夜な夜な妙国寺墓地に運び埋葬したと言います。境内には白虎隊士最初之埋葬地の碑がたっています。

1ヶ月後、会津藩は降伏します。日本は明治と元号が替わりましたが、新たな遺恨は会津の方の心に残りました。

1986年、長州の萩市が会津若松市に対し、友好姉妹都市の話をもちかけたことがありました。萩市側があれからもう120年も経ちましたと伝えると、会津若松市側の返答は、まだ120年しか経っていませんというものでした。この為に友好姉妹都市の話は白紙になったとのエピソードがあります。

松平容保が白虎隊士の殉難忠節を詠んだ甲歌です。

幾人の涙は石にそそぐとも

その名は世々に朽じとぞ思う



▲官軍・世良修蔵の墓



▲白虎隊士仮埋葬の妙国寺



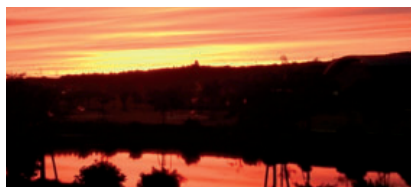
▲白虎隊奮戦の戸ノ口原



▲母成峠古戦場



▲会津若松城(鶴ヶ城)



▲会津若松市方面の夕日を望む



▲当時の鉄砲弾が無数に残る築地堀



▲会津藩主・松平容保の墓

大倭そして戸隠への縁

埼玉県蓮田市

冬 崎 流 峰



信州の戸隠との縁は40年ほど前にさかのぼる。私が戸隠と離れられないのは、この地に「山小屋の会」が建てた建物があるのが決定的要因ではあるのだが、(この「山小屋の会」についてはとても書ききれぬものではないので省略せざるを得ない)それが、「戸隠」という土地であったのがものすごい事だったのだと10年ちょっと前に気が付いた。

とにかく景色が良い。景色がいいというのはこういうことだ……：…みたいな世界が広がっている。そしてそれは、いきなり感じるのではなくじわじわと入ってくるのである。

そしてもちろん、近年ブームとなっているパワースポットたるゆえんの、エネルギーの在り様もまた強烈な引力だ。

もともと私は、神様の世界とは縁遠い環境に育ち、極端に言えばそのようなことはすべて迷信であるみたいな意見を持った人間であったかと思う。それがまさに、定められた人生でもいいのか、徐々に磨かれ変化していったように思われる個人史がある。

今から30年程前になるだろうか、何か英語の文献に取り組んでた時、ある単語の日本語訳が「天の配剤」となっていた。それは当時の私には理解不能な世界であったが、その時は西洋の文化にはそういう視点があるのだな……位の感じで、妙に納得したのを覚えている。そしてその頃から身の回りに起きるいろいろな事が縁として繋が

っていく。伊勢神宮に何回も行くことになったり、奈良の天河でたぶん初めて未知のエネルギー体験をしたり、そして戸隠の靈性に導かれていくのである。

さて、私と大倭紫陽花邑との縁は42年前にさかのぼる。交流の家で泡沫コミュニティと名付けられた集いがあった、それになぜか参加していたのだ。とにかく強烈な印象とインパクトのあった集いであった。1974年6月、2回目の日本一周の旅の途中のことである。

それは、それ以前に縁のあった岸田哲さんのお誘いによる参加であったかとも思うが定かではない。しかし、当時活動していた「人間解放」のためのみたいな様々な関係の中での出会い、訪問だったのは間違いない。

そして西暦2000年、大倭で賑栄塾が開催され参加することとなる。大倭へは数十年ぶりの2回目の訪問だったと思うが、これもまた不思議な縁だった。賑栄塾とは、いろいろな人たちがなぜか集まってくる年に一度の、日本各地を回る泊りがけの集まりであるが、ここに散発的に参加していく中でいろいろな展開が起きる。具体的に何がどうということはないのだが、賑栄塾抜きでは語れない今の私を思うと、まさに天の配剤である。その一つ、千葉県にある麻賀多神社(天日津久神社)へのご縁もこの流れからで、たまたま息子の引越越し先の近所だということに寄ってみたら

あらま、何かが私に降りてきて、私はわあわあ泣いているのだった。ここが、知る人ぞ知る、王仁三郎の弟子の岡本天明氏に、日月神示がおろされた最初の場所だと知ったのはだいぶたってからのことであった。

スキーを中心に、人生を遊び倒す場所として戸隠と関わっていたのが、いつからともなく優しい

時空としての戸隠になっていったのはたぶんその辺が契機なのだろう。(遊び倒すのをやめたわけではない……)

そんな中で、ここ2、3年、もう一つの心打つ変化を感じている。これは戸隠だけでなく日本中の神社仏閣すべてに言えると思うのだが、20代から30代前半の若い参拝者が極めて多い。そして昔に比べて相対的に多いというだけでなく、その参拝という行為の本身、質が濃いという雰囲気がある。みんなが行く観光地の神社仏閣だから足を運び、真似事のお参りをするという、正直私自身がそうだったスタイル……、とは明らかに違ってきていると感じているのは私だけなのであるか。神、靈性への想いが集合意識として具現化しつつあるようで、本當にわくわくしてしまう。

昨年の賑栄塾は、20回を数えて一応最終回という触れ込みで埼玉の秩父で開かれた。こういった集いは続けたいと願う人は多く、それぞれがそれぞれのやり方、集まり方で、賑栄塾というキーワードを利用活用していけば面白く広がるだろう……。という事で今年の4月、有志を誘って戸隠で賑栄塾番外編を企画してみた。未来に繋がっていく何かは垣間見れた気がしてとりあえずホッとしているのだが、それもこれも参加してくれた人達との出会い、縁が生んだ時空だったんだと実感する。

今、まさに神の意志、宇宙の波動によって織り出されている私の生き様があり、そのことに感謝感動している私がいる。この稿をしたためることになった流れもまた、私にとって大切な縁であるし、これらのことを含め、廻りに起きていることはすべて、偶然たまたまの出来事、関係ではなく、天の配剤による必然なんだと改めて感謝する今日この頃である。

大倭千一夜

(其の二十八) 昭和42(1967)年12月23日『大倭』10・11・12月合併号通巻第28号より再録

柔よく剛を制す

法主 矢追 日聖 (満56歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

抱擁徳化の大慈悲心

映画やテレビで見ると時代ものには、大抵チャンバラの場面がありますね。主役は強くて腕も立つようにできていて、始めのうちは中々刀の柄には手をかけないで右に左に体をかわしながら「当身」を使っていることがありますね。まあこれは約束ごとの演技といいながらも、中々あざやかなものです。

この当身をまともにくらえば、一あわふいて仮死の状態で倒れるのですが、反面これに対して蘇生させる「活」という技もあるのですよ。古くから日本で伝えてきた武術の中でね、この殺活自在といわれるこの秘法を会得することは修行の中でも一番難しいことのようにです。

刀を使って相手を斬り倒したり、当身をもって相手を殺すような技の修行は、武術の中では一番劣等な初歩的なものだからね。こんな種類の人間は、実は何時の世にも沢山いて表街道を横行闊歩しているんです。現在でもいますよ。「話せば分かる」ような文化人が寄り集まった社会ならいざ知らず、現実はずいぶん甘いものではありません。犬養さんだって殺されましたからね。血の気の多い腕自慢の小心者が、国家的にも社会的にも大きな損失になることも考えないで、惜しい人物を白昼堂々と英雄気取で殺傷するという事件もあり得ることですからね。ましてや「朝に紅顔ありて夕

に白骨となる」ような世相の中で生きていた過去の人の中には、これではつまらん、何とか社会の浄化をはからねばならないと思いついた人が、宗教的に悟りの道を開いたり、いや、そんな静かな自己満足では物足りない、暴力を振り廻して自己の欲望を満足しようというような族には、暴力で押さえてから善導しようという動的な思潮もおおずと生まれてきたと思うんです。

乱世であればあるほど武術は立身出世のためにも、またいろいろな意味での自己防衛にも欠くことのできないものとなってきたわけです。数の中ですから名人、達人と称せられる人もあったと思います。無念無想は達人の境地といわれますが、これは中々難かしくて、字からくる意味ではその内容はつかめなれないと思います。私だってほんとの意味は分かり兼ねますがね。思うに、ですよ。達人の心は勝つや負けるということは思わない。相手と自分ということも意識しない。相手を斬るといっても、自分を守ろうということも、そんなものもろものことに囚われない心境を指していると思います。勿論、こうなるには絶ゆまぬ稽古に励まなければならぬのですがね。

「柔よく剛を制す」といいますがね。この意味においての柔が、武術百般の基礎をなしている所謂「柔」なんです。だから柔の根本精神は、相手を抱擁徳化するといった大慈悲心を指しているのです。たとえ武器を持ったとしても、この武器によって柔の精神を顕わすのが真の武術といえるの

です。斬捨御免流の殺人剣ではなく、相手の慢心を押さえて改心させるような活人剣が、日本在来の武術の根源であったようですね。当身の場合もその精神内容は活人剣と同じことなんです。これは相手を傷つけないで仮死に追い込む法ですから最も合理的といえるでしょう。達人なんかを使う当身には手加減がありますから、活を入れさえすれば必ず蘇生するものです。入れてももどらないような盲目打は、これは当身とはいえないし、いわば暴力の一撃に過ぎないということですね。

武芸や武術では、柔術、剣術、槍術、弓術、泳術、馬術と区別できないもので、もとは全部が一本だったようですが、今のようにスポーツとして扱うようになったがため、これ等を切り離せるようになったと思いますね。

内に流れる精神を活かす

今は世が変わっていますから、古来の武術なんか日々の生活にはもう必要がなくなつたようですが、その内に流れていた本質的な武道としての精神は大いに生かすべきですね。特に殺活自在の法の「活」の方は、今の世にもかなり役立つ場合があると思うんです。

ああ、その話ですか。私もこの間新聞で見ましたよ。「柔道のカツ」という見出しがあったので注意したんです(昭四二・九・二八・朝日新聞一面)。大阪医大の兵頭正義麻酔学科教授(四十一歳)は約十年前から「活」について研究を続け、昨年西ドイツの麻酔医学専門誌『デル・アネスデシスト』十二月号へその研究の一部を紹介したところ、世界の麻酔学会からかなり注目されているという嬉しい記事でした。医学上から見ても合

理的のようだし、事故死の防止にも有効だとあれば、尚さら研究を進めていただきたいと祈ります。研究の至難なことはよく察しておりますが、当身をして活を入れて蘇生させるといった実験は、ちよつと無理ですからね。生きた人間を使わなくてはならないからね。当身にも活にも、かなり強烈な霊気の作用もいるんですが、科学者には分かり難いでしょう。

昭和二十七年五月七日のことでした。私はまだ掘立小屋（瑞光庵）で暮らしていた時です。朝の五時ごろ、隣り部落の藤ノ木の農家の主婦（四十歳）がただ一人で、しかも跣で寝巻のまま入口のバツラ戸を開けるが早いか、つかつかとかかけ上がったからたまらない、驚いた鈴木ははね起きたんです。その瞬間彼女は私の寝床へすかさずもぐり込んだものだ。汗臭いひすい頭髪の臭いが強く鼻をついたので、私は反射的に続いて夜具をけって立ち上がったというわけでした。彼女は数日前から近在のあるおがみ屋さんを信仰するようになってから精神異状を起こしたものでらしいのです。この時ならぬ突発事件には参りましたね。

彼女はむくむく起き上がり、庵を出たかと思うと、誰かの名を叫びながら遠くに見える母をとる農夫めがけて一目散に走り出した。鈴月は後を追う。彼女は四メートルもある鏡池の堤を盲目的に飛び下り、脱兎の如いきおいで次々と田毎の畦を蹴ってつつ走る。庵の外へ私が出た時は、髪を乱して遙か向こう用水池を目ざして……。驚きましたね。

死なしては大変だと思つて寝巻をぬぎ捨てながら私も走りまわりましたよ。ドボンと朝の静けさを破って彼女は案の定、加速度に乗った身を翻して投水したんです。それは見事でしたよ、常人ではとてもできる技ではありません。一たん沈んだきり、

私が池の近くへ走りついた時、ばかんと中央に浮かび上がったのですが、もがきもしないで静かに浮かんでいたので、寝巻と赤い腰巻が水面でフワフワ動いていて、その下からふっくらした白い丸い尻が時々ぞいでいた。あれだけ遮二無二走ったあげくドボンだから、これはつきり心臓麻痺で死なしたと思ひましたね。家族の人もいないし、大変なことになったわいと呟きながら私は後を追うように静かに泳いで近づいた。頭と足がヘアーピンのように無心に垂れているので、先ず寝巻の後襟をつかんで引き上げ頭だけ水面から出して、おもむろに岸辺へ泳ぎついた。堤の上では、鈴木や家の子がどうなることかと不安な顔付きで待機していたが、といてこのまま引き上げるのも一苦勞だしと思つた時ですね。

しつかと襟もとを把んでいる左手は微動もしないのに、右手が彼女の胸のあたりから急直下に臍の下で止まり、息吹と共に平手で一シャクリしたその瞬間、グニャーとして無抵抗だった彼女の体がかたくなつたと思うや否や、これまた遮二無二両手でかきむしるように草を握り、バタバタと滑りながらはい上がろうとする。嬉しかったね。こちらが蘇生した思いでしたよ。遅い大きなお尻をだかえて堤へほおり上げたという始末だったんです。

霊障害による狂気でしたので、この病気は間もなく治癒したんですがね。彼女は今も健在でよく働いていますよ。 昭四二・一〇・三 日聖記

いほれずみ 「想い出す」

三重県名張市 服部洋平

宮本武蔵は、「真実とは、初めからあるもので、教えるものでも教えられるものでもなく、想い出すものである」と考えていたそうです。普通は、

努力して成長して何かを身に付け、今の自分を超えた何かになる。そう考えられると思います。しかし、この考え方は、ベクトルが全く逆です。

「知識は得るもの、英知は訪れるもの」。この考え方も宮本武蔵の考え方に近いような気がします。

法華経という仏教の経典があります。この経典の評価に関しては、いろいろな意見があると思うのですが、法華経は大乗経典のなかで、最も有名なお経です。日本では、法華経を高く評価する人が圧倒的に多いと思います。

法華経の如来寿量品第十六に、こんな話があります。「私（お釈迦様）は、釈迦族の高貴な家から出家し、修行して、この上ない正しく完全な悟りの境地に達したのではなく、この上ない正しく完全な悟りの境地に達して以来、幾百・千・コイティ・ナユタ劫もの長い時間にわたっているのである」と。つまり、今世で修行して悟りを得たのではなく、遙かな過去（過去世）において悟りを得てから天文学的な時間が過ぎていくということです。ざっくり言うと、「実は、とつくの昔に成仏してました」という事になるでしょう。これって一体どういう事なんでしょう？

私の考えている事は、法華経の正しい解釈ではないと思います。勝手にそう思っているだけなのですが、私はこう考えます。「がんばって、努力して、成長して、自分を超えた別の何かになるのではなく、最初から最初よりも遙か昔から、そこにあるんだから想い出さない」と言われているのではないかと。宮本武蔵の「真実とは、想い出すもの」という考え方は法華経のこの部分と同じではないだろうか。

私も死ぬまでに真実を想い出してみたいものです。

あじさい日誌

5月15日 大倭神宮月次祭。多賀朋子さん(神奈川県横浜市)と相澤孝幸(同県川口市)さんが、祭典前の午前中にも住和子さん(大和郡山市)が参拝されました。

5月22日 大倭会文化行事で京田辺市の一休寺へ。近所とのことでキャンパーOBの福田三郎さんも来てくれ、昇ちゃんも車で連れて行ってもらえて参加者13人。詳細報告は後日。

5月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成5年5月23日の法話をお聞きしました(平成27年6月号『おおやまと』に「幸せはお付き合いの輪を広く持つことから」として掲載分)

5月27日 午後2時から大倭病院会議室にて平成27年度大倭病



5月28日 午前10時半から奈良パークホテルにて邑交会。

良、大事をとって同窓会を欠席。ねた監督河瀬直美・原作者助川ドリアン・主演樹木希林さん(右より)を案内した時のもの。ただ美代治さんは体調不良。

第40回
**大倭安宿苑
夏まつり**
7月30日(土)
15時~模擬店
16時~アトラクション
於 あすか第1駐車場にて
お問合せ/安宿苑事務局(担当 舟橋)
TEL 0742-48-3221

5月29日 午後5時から紫陽花邑西斎庭で紫陽花邑と近隣住人の初めての交流親睦会として、パーベキューが行われ42名

院決算および大倭大本宮一般会計決算会議が開かれました。
5月28~30日 交流の家で新良田教室(長島愛生園にあった岡山県立久高分校)第一期生等11人の同窓会。2年毎に5回目の今回で最後と、観光はなし、ゆつくり過ごすということでキャンパーや色々な縁の方が交流に訪れました。大倭会館にも宿泊。ちなみに写真は、幹事の森元美代治・美恵子夫妻(左側)

が映画『あん』の撮影時、多磨全生園を訪ねた監督河瀬直美・原作者助川ドリアン・主演樹木希林さん(右より)を案内した時のもの。ただ美代治さんは体調不良。

6月6日 大倭神宮月次祭。祭典直前に福岡からという若いペアが参拝、お話しするまもなく帰られました。

5月26日 お楽しみ外出で姫路方面へ。
(長曾根寮)

5月5日(デイ)工作で壁面に大作の鯉のぼりと菖蒲つくり。
5月28日(特養)喫茶倶楽部あじさい。23名が参加されおやつや歌を楽しみ、最後に鳴子踊り。(茂毛路園)

6月8日 書道クラブ。
(八重垣園)

6月10日 6名の方が参加して毎年恒例の梅酒作り。

南阿蘇村で防災プロジェクトを立ち上げ!

南阿蘇村久石 栗山美智子

4月16日の熊本地震は南阿蘇村に甚大な被害をもたらしました。実際、私達も就寝中の突然の揺れに死ぬ恐怖を体験しました。私達が住む丸葉山地区は活

あんない

*月次祭(大倭神宮)
7月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第570回祝会
7月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
7月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)
7月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

東光大祭 祭典のご案内

平成28年8月17日(水曜日)・18日(木曜日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わる次第、拜殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭のあいだ拜殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等を聞いたり見たりしていただきます。

注意

祖霊祭の経木への書き込み受付は7月23日までとさせていただきます。